

メールレター（62）（2）

マダム田中の退院とその後

ドリトル先生は大忙しです。やっとたどり着いたマダム田中をどう扱ってよいものやら。家事も育児もしたことのない超マッチョのフランス人のドリトル先生の肩にすべてが掛かり、うろたえるばかりです。

冷蔵庫は空っぽ。家の中は、思い切って買ったロボット掃除機任せ。どうなることかと心配し、子供たちからはアドバイスが山のようにくるのですが、楽観的なドリトル先生は、真剣には考えてもみなかったのです。

世話係のいる病院と違い、自宅では、着替えも食事も体を拭くことも一人ではできず（右手、右肩は固定され使えません。左手で細かく切ったものをスプーンで食べるのみ。左脚は固定サポーターでのばしたまま）寝起きも不自由なマダム田中の身の回りの世話はドリトル先生が全てするしかなかったのです。

「食事はしばらくはウーバーイート（Uber Eat. 注文するとタクシーが届けてくれます）にしよう。」

これも1週間の話しでした。大変な注文の手間と経費が掛かるのがわかってきたのです。ドリトル先生は自分で料理を何とか試みたのですが、これも1週間の話しでした。その後はたまたま見つけた仕出しのフランス料理のパックを買って食いつなぐのみです。週に一度様子を見に来てくれる娘に頼んでオンラインで食材の買い物をしてもらい、フランス料理の仕出しパックと合わせて飢えをしのぐことになったのです。ドリトル先生は、雑用の蟻地獄に引きずり込まれ、疲れがますますばかりでした。マダム田中は、痛い手脚をだましまししながら、料理や家事をする日が遠くないことを感じてきました。

さて、マダム田中はというと、放り出された病院とその後の治療について戦うことになったのです。封筒に入っていた一枚の紙に書いてあった相談口に電話をして膝の手術と肩の骨折の自宅での治療方法や担当医との外来面会を尋ねることにしたのですが、

「貴女のカルテは膝の手術のみで肩のことは記載されていません。」

「肩もレントゲンもスキャンも撮って、固定サポーターをつけて自然治癒という診断も出ているのです。きちんと調べてください。それはないでしょう。」

嘘をついていると思ったようです。窓口担当看護婦は、

「サポーターをつけている写真と受け取った処方箋や書類のコピーを全部インターネットで送ってください。」

うるさがるドリトル先生に頼みこんで言われたメールアドレスに写真やコピーを送ってもらい、やっと、カルテが訂正され、治療法や外来面会の日が決まったのです。毎日電話を続け、これにかかること丸1週間。鎮痛剤で痛みを抑えて激痛と戦いながらのことです。判断も定かでない中の交渉はなんと疲れることか。電話が終わるたびに、寝込んでしまったのです。

その翌週のこと、玄関のドアをたたいたのが、病院と提携している介護センター（保健所のようなものでしょうか）の理学療法士（フィジオセラピスト）のサンドラでした。交渉のかいあってか、リハビリのトレーニング理学療法士（フィジオセラピスト）として送られてきたのです。肩と脚のリハビリが少しずつ始まりました。リハビリをさせ、宿題を出すとそっけなく帰っていくのですが、患者思いの良い人で、心身ともに救われました。まるで天使が舞い降りてきたかのようでした。

病院のベッドとは違い寝起きに不便な我が家のベッドには器具を取り付けさせ（取り付けにきてくれます）、寝起きの方法や、就寝中に痛む肩へのクッションの当て方などを指導してくれたのです。容赦ないリハビリの宿題も忘れませんでした。

そんなある日、強い鎮痛剤や怪我のショックで、いつの間にか体が破壊され、抵抗力がなくなっていったのか、アレルギーが出てきたのです。はじめは頭や胸、それが少し消えると太ももやお腹やお尻、それが少し消えると腕やもう片方の脚と、激痛の上に燃えるように腫れあがる、原因不明の体中のアレルギーに毎日悩まされることになったのです。食べ物から来るのかもしれないし（ろくな物を食べていないのですが）、ストレスからくるものかもしれません。複雑な状態の中、病院に相談する気にもならず、抗ヒスタミン剤を飲み、塗り薬をつけてアレルギーとも戦うことになったのです。

こうして3週間が過ぎ、アレルギーも峠を越し、サポーターが取れる時期になりました。担当医が勝手に取るように言っていたとサンドラに伝えると、

「わかったわ。とりましょう。もうバカンスは終わりよ。筋肉が弱っていて、また転ぶ可能性が高いのよ、こういう時は。そうなったら、また病院に戻ることになるわよ。今日から、本格的なりハビリに入るから。これまでのリハビリの回復状況は良好で予定通りです。とても良い生徒さんですよ。」

弱っている筋肉で不安定なため、また歩行器を使って歩くよう指導すると、リハビリのエクササイズのリストを更に増やしたのです。長い間使わなかった筋肉は、急に始まった動きに悲鳴を上げて痛みはじめました。

「はい、鎮痛剤を飲んで。続けるわよ。」

こうした日々の中、担当医との最初の外来面会で、回復にはまだまだ長い時間と努力がかかることがわかり、マダム田中にはある決意をすることになりました。いけばなインターナショナルの運営と6月の大事な支部創立50周年記念華道展の行事を、プレジデントとして続けて行くことは不可能なのが明らかになったのです。今は、エキセントリックな個人の感情にとらわれず、組織の運営を考えていかなければならなかったのです。いけばなインターナショナル行事の遂行を、20年以上に渡り二人三脚で運営にあったてきた、統率力と実行力のある友人に託すことにしたのです。彼女なら、いけばなインターナショナルモントリオール支部の50年の歴史も十分把握していて、卒なく全てをまとめていけることでしょう。電話とり、

「支部の総会、50周年記念華道展と式典を貴女に頼みたいの。貴女ならやっていられると思う。コロナで混沌した状態かもしれないけれど、実行可能だと思うから。」

「わかったわ。何とかしてみる。回復できるようしっかり頑張る。」

華道展のポスターや案内状の素晴らしいデザインを毎回している、グラフィストの華道展組織委員長（3-4人しかいない委員会なのですが）にもう一通の電話。

「治療に時間がかかりそうなの。今回、華道展も記念式典も無理そう。あきらめることになりそう。後は、二人で協力して華道展と記念式典を遂行してほしいの。」

しばらく沈黙が続くと、（涙もろい人だから、涙ぐんでいたのかもしれませんが。）

「わかったわ。何とかする。回復できるよう頑張る。」

マダム田中は、二人の友情に賭けることにしたのです。翌々日、二人は、行事遂行に向けて走り出し、会場になっている日本館館長と会うと行事の詰めに入ったのです。幸い、コロナの影響もクリアされ、華道展や式典もつつがなく遂行できることになったようです。いけばなは、日本の花の生け方を当地に伝えただけでなく、友情も培ってきたのだと改めてマダム田中は思うのでした。

マダム田中は、病院との闘いやリハビリを続けながら回復に向け、日一日、日一日過ぎていく日の数を指折り数えております。